

## ボランティア活動と学習の関係 - 有意義な学習のために -

石川 昇  
(国立科学博物館)

### 【要旨】

生涯学習施設におけるボランティア活動は学習と密接な関係があるが、ボランティア活動より学習を優先させる考え方を発生させ、ボランティア活動を優先させる考え方と対立し、ボランティア活動の現場に対立と混乱が起きる場合が見られる。

そこで、博物館でボランティア活動を行う人々にボランティア活動と学習について話を聞くと、彼らがとらえる「学習」の意味する内容に幅があることがわかった。ボランティア活動より学習を優先させる人の「学習」は特定分野に関する狭義の学習であり、ボランティア活動を優先させる人の「学習」はより広い分野で、人間論や人生論も含む広義の学習で、活動を行うことが学習にもなるということであった。

後者の、ボランティア活動を行うことが学習にもなるという考え方を検討し、有意義な学習のあり方を考察する。

### 1. はじめに

生涯学習施設におけるボランティア活動は学習につながる、とされているが、ボランティア活動の、どの部分がどんな学習にどのようにつながっているのかということはまだ論じられていない。

しかし、その際の「学習」のとらえ方により、ボランティア活動に対する考え方や姿勢が異なってくる。そのことで、「活動」や「学習」についてボランティアや職員が、あるいはボランティア同士、職員同士が共通認識を持つことができず、対立したり、混乱したりすることがある。

本研究の目的は、博物館でボランティア活動を行っている人々に学習についての意欲、活動と学習の関係について話を聞きながら、ボランティア活動のどの部分がどんな学習となるのかを明らかにし、ボランティア活動における、より有意義な学習のあり方について考察するものである。

### 2. 「ボランティア活動」のとらえ方

本論で検討する「ボランティア」は次のように規定する。

ボランティア活動は、一般に、自分が生きている基盤である地球、社会、人々のあり方について理想を持ち、その下に自分が果たしたいという課題を得たときに、地球や社会や他者のために（社会性、公共性）、自ら進んで（自発性）、対価を目的とせず（無償性）、自分の知識、労力、財、時間などを提供する活動である。このことは、一般に、「ボラン

ティアの3原則」と言われている。<sup>1)</sup>

これに、先駆性や開発性を加える考え方があり（4原則）、平成4年の生涯学習審議会答申は次のように、4原則としている。

ボランティア活動は、個人の自由意思に基づき、その技能や時間等を進んで提供し、社会に貢献することであり、ボランティア活動の基本的理念は、自発（自由意思）性、無償（無給）性、公共（公益）性、先駆（開発、発展）性にあるとする考え方が一般的である。<sup>2)</sup>

1987年には『学習ボランティア』という本が発行されたが、そこで稲生勁吾はボランティアの性格として、無報酬性、自発性、博愛性、自己提供があり、さらに継続性があるとしている。<sup>3)</sup>

また、1991年刊行の『生涯学習社会とボランティアハンドブック - 人間が人間らしく生きるために』で、斎藤信夫、桐澤弘子は「ボランティア活動は、自主性と自発性と主体性、社会性、無給性を生命とし、原則であるといわれるが、それに市民性、素人性、先駆性、それに共感性を付け加えたい」と述べている。<sup>4)</sup>

社会性は利他性、公共性、公益性とも言われるもので、ボランティア活動の目的が自分や家族のためでなく、社会や他者のためであり、それらがどうあるべきかという自分なりの考え、理想の下に、自分が関わりたいという課題を得て、活動を企画し、活動を意志するということである。社会性への志向がなければボランティア活動は発生しない。

自発性はボランティア活動への姿勢で、義務や強制されるものではなく、自分で感じ考え意志を持って行うものである。そして、たとえ勧誘されて行う場合でも、活動する自己への責任は自分自身が負うというものである。このことは、自主性、主体性とも言われる。早瀬昇は「現実のボランティア活動は“我慢してする”というより、“我慢できないからする”ものだ」とし、ボランティア活動の核心は自発性だといわれるが「この「自発性」なるものの正体は“抑え切れない思い”＝“will”だ」「ボランティア活動は“must”というより“can”の世界なのだ」と述べている。<sup>5)</sup>

無償性は賃金などの対価をとらないという意味であるが、それは表彰や何らかの職や地位への就任など代償行為のような事柄も含むもので、無給性、無報酬性、さらには非営利性とも言われる。

先駆性は先駆的に課題を発見し、その解決のために先駆的に対応するという意味であるが、新たな活動を開発するという観点から開発性とも言われる。これは、社会性における意義、良さ、効率性、やりがいなどをつきつめて、どんなボランティア活動をいかに行うかについて検討していく過程で生じる性格で、先駆的、開発的、あるいは実験的、場合によっては挑戦的な発想や姿勢が生まれるということであり、あらゆるボランティア活動実践者はそのような積極的な姿勢を持つべきだろう。

継続性はその場その時だけでなく、継続して実施するという意味である。

このように、ボランティア活動は、社会性を持った活動を、自発的に、自分の利益を図らずに、開発的に行う活動であるととらえる。

### 3. ボランティア活動における学習への注目と誤解

どのようなボランティア活動を行う場合でも、組織や団体の中で行う場合はルールやマ

ニユアルがあり、一人で行う場合でも、自分勝手ではなく、何をどのように行うか学習して行う必要がある。このように、ボランティア活動を行う際には活動の内容、方法についての事前の学習が必要だ。

そして、多種多様なボランティア活動の分野のなかでも生涯学習施設におけるボランティア活動は、施設が業務として知識の成果物や知識の分析対象物を扱っており、施設によってはそれらに囲まれて活動を行うと言っても過言ではない。また、活動を十全に行うために研修があり、知識を教え伝えるという活動内容は蓄積した知識や学習した成果を使って行うものであるため、ボランティア活動者自身の学習につながると言われてきた。

平成4年の生涯学習審議会答申「今後の社会の動向に対応した生涯学習の振興方策について」は、生涯学習とボランティア活動の関連を次のように指摘している。

生涯学習とボランティア活動との関連は、次の三つの視点からとらえることができる。

第一は、ボランティア活動そのものが自己開発、自己実現につながる生涯学習となるという視点、第二は、ボランティア活動を行うために必要な知識・技術を修得するための学習として生涯学習があり、学習の成果を生かし、深める実践としてボランティア活動があるという視点、第三に、人々の生涯学習を支援するボランティア活動によって、生涯学習の振興が一層図られるという視点である。これら三つの視点は、実際の諸活動の上で相互に関連するものである。<sup>6)</sup>

それより前に、社会教育審議会はボランティア活動は生きがいを高めるなどと指摘してきた。「社会教育施設におけるボランティア活動の促進について」(昭和61.12.3)では、「ボランティア活動は、一面ではさまざまな相互の触れ合いの中で、教えかつ学ぶという相互学習の機能を持っている。したがって、人々はボランティア活動に参加することで、自らの知的、精神的世界を広げ、生きがい意識を高めることも期待できるのである。」とし<sup>7)</sup>、また、「博物館の整備・運営の在り方について」(平成2.6.29)では、「博物館活動の活性化を図るためには、その活動等に関わる多彩な人材が必要であり、また人々の社会参加意識を高めるためにも教育ボランティアの導入等を促進する方策が必要である。特に専門的知識や技術をもった人材を活用するとともに、高齢者などの生きがいを高め、その豊かな経験や知恵を発揮させるような多様なボランティア活動の場を積極的に提供することが極めて重要である。」とした。<sup>8)</sup>

「学習ボランティア」「生涯学習ボランティア」という言葉も登場した。稲生勁吾は『学習ボランティア』において、「学習ボランティアとは、市民の人間性や知識・技能などの向上をめざす生涯にわたる学習の指導や助言や援助をするボランティアのことをいう」としながら、「学習ボランティア活動は学習活動という側面を持っている。つまり市民の学習を援助する活動が、同時に自分の学習になるという側面を持っているのである」とし、学習の内容は「新しい経験を得る」「学習する意欲を誘発される」「交際範囲が広がり、かつ深まるので、精神的安定を得るうえに、情報入手の機会が増え、良好な人間関係を結ぶ能力を身につける」ことである、としている。<sup>9)</sup>

しかし、ボランティア活動における学習の可能性に注目するあまり、活動より学習を優先させる考え方が起こる場合がある。

ボランティア活動参加者で、学習をするためにボランティア活動に参加するという人が現れる。これは、ボランティア活動に参加しながらも、第一の目的は学習で、ボランティ

ア活動は学習のための手段、道具として位置づけられている。そして、ボランティア活動のために行われる研修に参加したり、施設を使って学習したり、講師や施設の専門職員から講義や説明を聞くことに価値を感じている。

受入側の施設でも、生涯学習施設のボランティアはまず学習ありきだ、あるいは博物館のボランティア活動は社会貢献活動ではなく館の教育普及活動の変形だ、などと言う考え方が現れる。国立科学博物館では、平成8年から隔年で全国博物館ボランティア研究協議会を開催しているが、第1回において次のような発言があった。

「ボランティアは博物館における積極的な施設利用者であると考え。ボランティアを導入するとスタッフの手間は増える。しかし、館の活性化に結びついている」<sup>10)</sup>

「ボランティアは生涯学習の一環として館を利用していると認識している。ボランティアは自分たちの学習の場として、手段として、ボランティアという立場をとっていると考えている。館としても生涯学習の場を提供していると考えている」<sup>11)</sup>

滋賀県立琵琶湖博物館の布谷知夫は「博物館でのボランティアの本質は自己実現或いは自己学習という点であろう」「博物館ボランティアは自己学習の要素が強い」とし、次のように述べている。

博物館を利用する利用者は、何よりも自分が楽しみ、学ぶために博物館をたずねるのであって、誰かの役に立とうとして博物館に来るわけではない。また、継続して博物館を利用し、或いは博物館の事業に協力する場合も、あくまで自分が学ぶためであったり、ボランティアとして活動をすることで、博物館や人のためというよりも自分が学ぶためであるという目的が非常にはっきりしている場合が多い。博物館に対する労働力の提供といえそうな、例えば発送物の封筒詰めや発送作業のようなことすらも、その事業に関わる一連の情報収集や学習に関連するからこそボランティアとして参加するのであって、自発的な行為であるように見えても、実際には自己学習という目的が強い。この点が博物館でのボランティアについて考えるための重要な点である。<sup>12)</sup>

しかし、学習をしたいなら学習をすればよいのであって、ボランティア活動はボランティア活動をしたいからするものである。「ボランティア活動をすれば学習にもなる」のではなく、「学習をするために、ボランティア活動をする」という論理は本末転倒と言わざるをえない。このような学習第一という姿勢でボランティア活動をして、あくまで学習活動ではないボランティア活動に対しては常に不満を抱き続けることになり、責任ある活動をとることは難しい。

このような学習を第一の目的とするボランティア活動は「ボランティア」という言葉を使うべきではない。それは、ボランティア活動は1.で確認したように、自分なりの理想、理念の下に社会貢献という目的をもって行うものだ。社会貢献という本来の目的で参加するボランティアに対して、受入施設側が本音は学習であるはずだと断ずることは、ボランティア活動の本旨を理解していないばかりでなく、誤解、中傷であり、その精神を傷つけることになるだろう。

#### 4. 広義の「学習」と狭義の「学習」

筆者が勤務する国立科学博物館でボランティア活動をする人々にボランティア活動が学習につながっているかを聞いてみた。すると、ボランティア活動ばかりで学習が少ないと

か、もっと研修が多かったり研究者に話を聞く機会が多いと思っていたのに少なく、学習につながらないと言う人たちがいた。そして、その一方で、大いに学習になると言う人たちもいた。この考え方の差異は、まさに、ボランティア活動と学習についての考え方で混乱を起こしている現れであった。

国立科学博物館は自然科学系の博物館であるので、前者は自然科学の特定の分野に関する狭義の学習であるが、後者についてどのような学習であるのか話を聞くと、狭義の学習ももちろん得ることができるが、それだけでなく、広い分野の自然科学、そして、人間との関わり、さらには社会勉強、人生勉強なども含む広義の学習になるということであった。とくに来館者、ボランティア同士、館職員とのコミュニケーションにおいて、人との知識や感情の分かち合い、学び合い、励まし合い、そして、自分自身の人生への対し方についての勉強や試練になるという学習で、そこに価値ややりがいを感じているということであった。狭義の学習については、人に話す活動であるために、間違ったことを言わないように、より興味関心を持っていただくように、しっかり学習していると言い、さらに、見学者との質疑や対話の交流のなかで、知識が確固としたものになり、広がりや深まりを持つようになり、学習課題も生まれると言う。

前者はボランティア活動のための事前学習としての研修会や、ボランティア活動において研究者から自然科学の分野についての話が聞く機会が少ないと言い、活動自体は付加的なものを見なしている人が多いのに対し、後者はボランティア活動そのもののなかで狭義の学習も広義の学習も、さらにやりがいや生きがいも発生していると述べ、狭義の学習はボランティア活動ではなく、自分でやるべきだと述べている。後者はより高いレベルの活動を行うために、研究者から指導を受けるという希望がある場合もあるが、これは、あくまで活動を前提としているものである。

同じ「学習」という言葉を使うために、ボランティアと学習を関連させての話題のさまざまな点で齟齬を発生させていたが、二者の「学習」は意味が異なっていること、さらに、それぞれの「学習」は発生の場所も違うことがわかった。前者の「学習」が発生する場所は、事前学習や研修であり、講師や施設の専門職員とのコミュニケーションであるが、後者の「学習」が発生する場所は、前者の場所も含まれるものの、それ以上にボランティア活動の現場そのものであり、そこでの学習した知識の出し入れや、ボランティア活動の対象の人々やボランティアとのコミュニケーションであるとしている。前者の「学習」は「してもらおう」受け身の学習であるが、後者の「学習」はそれも含みつつ、受けた学習を積極的に使いながら、共有したり、交換したり、分かち合うもので、その過程で学習が発展、成長したり、新たな学習が起こるプラスアルファの可能性まで含んでいる、前向きで幅広く、柔軟な概念になっている。

前者の学習はあたかも学校の教科学習のような性格を持ち、指導者主導の受動的学習であるのに対し、後者の学習は社会との関わりの中で生じた、ボランティア活動を行うための課題解決型の学習であり、学習者主導の自己管理型の学習であるといえよう。

ここにおいて、3. であげた平成4年の生涯学習審議会答申「今後の社会の動向に対応した生涯学習の振興方策について」における「学習」は、狭義の学習とともに、広義の学習も含んでとらえるべきことがわかる。

## 5. ボランティア活動における学習

人は日常生活において、常にどうすることがベストか、あるいはベターか、良きことを求めて自分を企画し、人生の岐路を選択しながら生きている。ボランティア活動においても、たとえその活動内容がどのようなものであっても、活動の目的、方向性、内容、方法、留意点、背景の知識等について、より良きものになるように、蓄積した知識を絶えず再確認し、検討しながら行っている。しかも、他人に話をしたり、蓄積した知識をもとに活動するということは責任がかかっている。そのような状況で知識を使うことで、知識は脆弱なものから確かなものになる。言い換えれば、他者から仕入れた知識が血肉化し、真に自分のものになるのではないだろうか。養老孟司は学習とは入力することだけではなく、「脳の中では入力と出力がセットになっていて、入力した情報から出力をすることが次の出力の変化につながっています」、「出力を伴ってこそ学習になる」と言っている。<sup>13)</sup> 知識は繰り返し出し入れし、現実の行動のなかで確認、検証され、淘汰されて、自分の知識となるのであり、その過程は学習といえる行為なのだろう。

そして、ボランティア活動で使う知識は、狭義の知識だけでなく、狭義の知識の応用や人間との関わり、さらにはそれを他者にどのように伝達あるいは教育するかなどの広い、いわば広義の知識を使いながら行っている。そして、そのことでそれら狭義の知識、広義の知識双方を使いながら、同時にそれらを養成している、言い換えれば学習しているのである。ボランティア活動という経験を経ながら、獲得された狭義の知識の細い枝は大きく広がっていく。同時に広義の知識である幹もさらに太くなっていくのだろう。

また、活動の過程での人間関係にも注目したい。

ボランティア活動者同士の関係は同じ目的や好みを持つ者同士が手を携えて、よりよい活動にするために、良さを求めて、励まし合い努力し合う、現代では得難い「同志」のような人間関係だ。

平成 12 年版の『国民生活白書』の前書きにおいて、堺屋太一は次のように述べた。日本では長く村落共同体を基本とする地縁社会が続いてきたが、戦後の日本は圧倒的多数の人々が職場集団に帰属する「職縁社会」となった。しかし、正社員採用を少なめにして派遣職員を増やしたり、終身雇用制が揺らいでいる現在、職縁社会の人間関係は急速に変質しようとしている。そして、血縁社会である家族や人間関係は核家族化の時代を経て、かつてと比べると、薄く小さくなっている。このような中で、これからの社会はボランティア活動などの自発的な組織、言い換えれば「好縁社会」の重要性が高まるとし、「ボランティア活動など好みの縁で繋がる世の中では、より自由に属する集団を選び、その時々状況によって移り変わることもできる。選択の拡大こそは、多様な知恵を基盤とする社会の最も尊い部分である。それだけに自らの好みと尺度を明確にもたなければならない」と述べている。<sup>14)</sup> ボランティアという好縁社会は互いに理想や活動を共有し、そのことの実現に向けて、工夫し合い、励まし合いながら社会貢献をし、やりがい感、達成感を分かち合っているのだ。

さらに、ボランティア同士の人間関係だけでなく、ボランティアをする側、される側の人間関係も検討したい。

黒川育子はニューヨークでボランティア活動をする人々取材した。そこで黒川は、「助けられる立場の人たちの態度にも感心させられた。弱者が強者からお恵みやお情けを授か

って小さくなっている哀れな姿でなく、どちらかといえば、彼らは堂々と助けられている。援助に感謝はしているけれども、必要以上にへりくだったところがない」と言う。そして、「助けられている人たちに惨めったらしさがみえないのは、それだけではないように思う。ボランティアたちはお金や物を配るだけでなく、弱い者の置かれている立場を理解し、彼らの感情を共有しようとしている。ボランティアが近づこうとすれば、助けられる人も歩み寄ってくる。二者の関係は強者・弱者の上下関係ではなく、痛みを共感する並列関係に発展していくのである。それは助ける人と助けられる人の双方がともに育て上げていく関係である」と述べている。<sup>15)</sup>このことについては、金子郁容も「ボランティアは「助ける」ことと「助けられる」ことが融合し、誰が与え誰が受け取っているのか区別することが重要ではないと思えるような、不思議な魅力にあふれた関係発見のプロセスである」<sup>16)</sup>と述べている。

相手がある場合の福祉のボランティア活動では、相手の悩み、苦しみ、辛さなどの状態や立場を理解し、受容しながら、ボランティア活動という自分の時間、体力、能力を使うことによって、相手の悩み、苦しみ、辛さなどを軽減する。それも相手に合わせて、相手とともに活動を作っていく姿勢が求められる。それは悩み、苦しみ、辛さなどを共有し、分かち合うことだと言うことができる。同じく、相手がある場合の教育や文化のボランティア活動では、相手の知識のレベル、範囲や興味を理解し、受容しながら、相手に合わせて、相手が自分で知識を発見、獲得できるように誘導していく姿勢が求められる。それは相手とコミュニケーションをしながら相手の理解、発見の道筋を作っていくものだ。それは知識、感動を共有化し、分かち合うことだと言うことができる。このように、ボランティア活動はボランティア同士、ボランティア活動の対象者とともに、より効果的な、より良い活動を作り上げていく行為である。

ボランティア活動はボランティアとそれに関わる人々にとって、地球、社会、人々のあり方などについて問題を把握し、どうあるべきかという理想を考え、自分ができることを効果的に行う活動である。そのような開発性の姿勢を持った活動、すなわち良きものへの追求を、柔軟な姿勢で、ボランティアの仲間やボランティア活動の対象者で行うことにより、新しい意味や価値を生み出す場合もある。このようなボランティア活動の過程は広い意味で学習であると言うことができよう。

## 6. ボランティア活動における有意義な学習のために

ボランティア活動は学習につながる、それは学習のための学習ではなく、ボランティア活動をより良いものにするために、充実させるために、狭義、広義のさまざまな学習をしながら、知識、学習成果を出し入れし確認しながらボランティア活動を行うという行為のなかで生み出される。

しかし、それにはボランティア活動に臨む姿勢が重要であり、地球や社会や人々のあり方に対し、よく考え、理想を持ち、その実現や課題の解決へ近づくために、よりよいボランティア活動の内容、方法を検討し、課題を共有しつつ、解決に向けて実践する。そのような積極的、開発的な姿勢が大切だ。

そして、ボランティアの仲間やボランティア活動の相手とのさまざまな人間関係について、相手を尊重し、理解し、受容し、分かち合う姿勢が、コミュニケーション、相互理解

の喜びとともに、充実感や達成感、さらには大いなる学習成果をもたらすだろう。

ボランティアは常にボランティア活動をより良きものにしようとする向上心を持つ限り、永続的な学習者と言うことができるだろう。

#### 注記・引用文献

- 1) 小谷直道『市民活動時代のボランティア』中央法規 1999 p28-30
- 2) 生涯学習審議会答申 「今後の社会の動向に対応した生涯学習の振興方策について」(平成4年7月29日)は4原則。東京ボランティア・市民活動センター編刊 『ボランティア活動をはじめようと思っているあなたに』(2001年)も4原則。
- 3) 稲生勁吾『学習ボランティア活動』 稲生勁吾ほか著 実務教育出版 1987 p5-7
- 4) 斎藤信夫、桐澤弘子『生涯学習社会とボランティアハンドブック - 人間が人間らしく生きるために』 社団法人日本青年奉仕協会 1991 p19
- 5) 早瀬昇『基礎から学ぶボランティアの理論と実際』 巡静一、早瀬昇編著 中央法規出版 1997 p3-6
- 6) 生涯学習審議会答申 「今後の社会の動向に対応した生涯学習の振興方策について」(平成4年7月29日)
- 7) 社会教育審議会社会教育施設分科会報告 「社会教育施設におけるボランティア活動の促進について」(昭和61年12月3日)
- 8) 社会教育審議会社会教育施設分科会中間報告 「博物館の整備・運営の在り方について」(平成2年6月29日)
- 9) 稲生勁吾『学習ボランティア活動』 稲生勁吾ほか著 実務教育出版 1987 p14-17
- 10) 11)『第1回全国博物館ボランティア研究協議会概要』国立科学博物館編刊 1996 p10
- 12) 布谷知夫 「博物館を活動の場とするボランティアの位置づけ」『博物館学雑誌 第24巻第2号』全日本博物館学会 1999 p19-28
- 13) 養老孟司『バカの壁』新潮社 2004 (新潮新書) p93-94
- 14) 堺屋太一『国民生活白書 平成12年版 - ボランティアが深める好縁 -』経済企画庁編 大蔵省印刷局 2000 pⅡ～Ⅴ
- 15) 黒川育子『ニューヨークのボランティア』朝日新聞社 1995 p13-14
- 16) 金子郁容『ボランティア - もうひとつの情報社会 -』岩波書店 1992 (岩波新書) p5